

高校生のセクシュアリティに関するピアエデュケーションを実施した大学生ピアサポーターの養成研修での学びの特徴

新潟医療福祉大学 看護学科 下山博子
山口典子
塚本康子
三澤寿美
中山和美

【背景】

ピア（仲間）による性教育は、ピアカウンセリング、ピアエデュケーションなど様々な方法で行われており、性教育の一手法として有効であると言われている。ピアカウンセラーの養成は、日本家族計画協会が主催する研修のほか、高村らが開発したピアカウンセリング・マニュアルに基づいて、全国各地で実施され、教育効果についての実証的研究が始まってきた。

しかし、ピアエデュケーションの実践者である大学生に焦点をあてた研究報告はまだ少なく、ピアサポーターを体験した学生がどのような自己の変化や学びをしたと認識しているのか、その学習経験が示す特徴を帰納的に明らかにしていく必要があると考えた。

本研究は、性教育プログラムへの協力要請があった新潟市内のA高校においてピアエデュケーションを体験した大学生が、ピアサポーター養成研修でどのような体験をしたのかに焦点をあて、その学習経験の特徴について明らかにした。

【方法】

大学生がピアサポーター養成研修をととして体験した内容について、半構成的面接法を用いてインタビューを行ない、その質的データを分析した。

研究期間：平成20年5月～9月

対象者：ピアサポーター養成研修を受けA高校の高校生にピアエデュケーションを実施した大学生のうち、研究協力で賛同の得られた学生6名

分析方法：持続的な比較分析を用い、データの分析と解釈（分類、抽象化）を行なった。研究の妥当性を確保するために、結果については研究担当者全員で合意に達するまで協議した。

研究における倫理的配慮：

研究協力者（対象者）に対して、研究の趣旨およびプライバシーの保護について書面と口頭にて説明を行い、署名をもって同意を得た。また、研究への協力は自由意志であり、研究担当者は教員であるため、学生との関係や成績には影響のないことを強調した。インタビューの際には、心理的脅かしのないように細心の配慮をし、得られたデータは研究以外には使用しないことと、研究終了時には再現できないように破壊することを約束した。

なお、本研究は、本学倫理委員会の承認をうけて実施した。

表1 研修内容

第1回	高校生がセクシュアリティについて理解するための「妊娠・出産・性交」をキーワードにした指導案を大学生にPBL（問題基盤型学習）で作成させる。
第2回 第3回	大学生は、自分たちが作成した指導案に基づき模擬授業を行う。
第4回	「対話改造プロセス」を用いたロールプレイを大学生同士で体験させ、個別対応の際のピアサポーター役割について考えさせる。

【結果】

インタビューから得られた質的データの範囲を養成研修での体験に限定して分析した結果、45のデータから91のコードが抽出され、30のサブカテゴリ、「模擬授業の困難さ」「授業内容の工夫」「メンバーからの気づき」など10のカテゴリが創出された。

【考察】

ピアサポーター養成研修において、大学生は模擬授業の難しさを感じながらも、セクシュアリティについて高校生に伝えたいこと、また伝え方を模索しながら、他メンバーと協力し、ピアエデュケーションが成功するように工夫と準備をしていた。そして、養成研修の時間配分、知識不足から自分たちの準備が不十分になることも理解していた。

PBLによる研修方法は、主体的に自ら考え、またメンバーから学ぶという特徴があることから、ピアサポーターとして大学生を養成していく上では、有効な学習方法であることが確認できた。

【文献】

- 1) 入江晶子, 黒野智子：高校生を対象とした看護学生による健康教育実施の試み。聖隷クリストファー大学看護学部紀要。13：115－122。2005。
- 2) 濱田維子, 小林益江, 佐藤珠美, 江島仁子：看護大学生ピアエデュケーターによる小学生への性教育活動の試み。日本赤十字九州国際看護大学 IRR。5：10－16。2005。
- 3) 前田ひとみ, 高村寿子, 渡邊至, 大石時子：高校生を対象とした大学生による思春期ピアカウンセリングの評価（I）。南九州看護研究誌。5（1）：11－18。2007。
- 4) 池田優子, 杉原喜代美, 栗田佳江, 他：群馬県におけるピアカウンセリング活動の取り組み－活動の効果と継続性に関する考察－。高崎健康福祉大学紀要。6：169－183。2007。
- 5) 水谷聖子, 加藤章子, 大橋裕子, 他：思春期における性教育の試み（2）－市民講座に設定したピア・サポーターによる生や性の教育－。日本赤十字豊田看護大学紀要。1（1）：33－41。2005。